



博物館による町づくり

小瀬 洋喜

協会会員館「大和町歴史民俗資料館」が「古今伝授の里・フィールドミュージアム」に改称し、装いも内容も新たに。新しくなったのみならず、この野外博物館を基本とする町づくりが出発したのである。

大和町歴史民俗資料館は、東氏所蔵の古今伝授巻物を始めとする貴重な古文書類が町に寄託され、その収蔵展示を主な目的として設置された。村史編集委員会が、東常縁から宗祇への古今伝授の場所について調査研究を綿密に行った結果、東氏系譜当主の所在地が明らかとなり、その所蔵資料により従来の定説を正し、古今伝授が郡上大和で行われたことを示した。この縁により散逸を恐れた東氏当主から古文書類の寄託を受けたのであった。

また、町では園場整備事業のブルドーザーが中国製磁器片を掘り出し、村史編集室に届けたことから県教委、文化庁の後援と指導を得て東氏庭園跡の確認に至り、中世武家庭園として国の名勝指定を受けた。

こうして、古今伝授の地としての認識が高まったところへ、番外能「くるす桜」謡曲本が見出だされて薪能として復活し、演能日の昼間に行われる七日祭りの神事(県指定無形文化財)とともに全国の愛好者が訪ねることとなった。

東氏の歌道家としての重さを示す鎌倉大草紙の説話はかねて知られていた。応仁の乱のとき篠脇城主で東軍に属した東氏数は、西軍の斎藤妙椿に城を落とされた。幕命により関東で戦っていた氏数の弟常縁の許へは、父益之の追善供養を行っていた所へ落城の報が届いた。

あるがうちにかかる世をしも見たりけり

人の昔のなおも恋しき
 と歌った常縁の歌が都で広く人々に知られ同情を呼んだ。妙椿も和歌に秀でてた武将であったので「和歌十首を詠んで贈られれば城を還そう」と伝え、常縁の贈った歌により城は還された。

日本の戦史に、戦わずして和歌で城を還した歴史があるだろうか。世界の戦史にも、詩を贈って平和を取り戻したものはあるまい。

これらの歴史と文学を基盤として、町は第三次総合計画に「古今伝授の里」づくりを掲げ、七月には、古今伝授の里・フィールドミュージアムが開園した。

白の目堀の篠脇城、常縁・宗祇が古今伝授の喜びを捧げた妙見神社、名水長刀清水、東氏ゆかりの寺社などを含んだ東西二キロメートルにわたる広いエリアをフィールドミュージアムとし、その中心に東氏館跡庭園、東氏記念館、古今植物園、和歌文学館、短歌図書館大和文庫、交流館ももちどり、研修館篠脇山荘などを配置している。

環境問題の新しい視点が求められる今日、自然を積極的に取り入れた施設配置をし、開発と保全の調和へも配慮しているのみならず、俗受けのする施設を厳しく排した施政は、博物館の在り方からも注目すべきものである。

心の時代が言われ、博物館の新しい使命が論じられる今日、何よりも博物館関係者のご支援によって、博物館を町政の基本においたこの施策の成功を願わずにはおれない。

(大垣女子短期大学顧問)

平成5年度

東海地区博物館連絡協議会 日本博物館協会東海支部 総会に出席して

と き 平成5年7月6・7日

ところ 名古屋市千種区ルブラ王山

“会員相互の連絡と博物館事業の振興をはかる”ことを目的に、神奈川、静岡、山梨、愛知、岐阜の5県の博物館及び博物館類似施設の会員105名が参加して上記の会が開かれました。

現在、5県で個人会員を含め440館がこの会に加入していますが、この数は、発足当初の約20倍になるとか。以下、会の概要を紹介します。

〔来賓挨拶の中から〕

愛知県と名古屋市の両教育委員会からそれぞれ挨拶がありました。ともに、地域の特性を生かした博物館の整備の大切さ、博物館が従来の観賞型だけでなく、参加型、調査研究型としての機能も要請されつつあり、学習者の視点に立った基盤づくりの大切さを強調されました。

〔表彰〕

平成5年度の被表彰者は3名でした。本県からは、松本五三氏が表彰を受けられました。氏は、昭和45年に、郡上八幡民芸美術館を設立され、館長として館の運営にあたってこられました（館は59年4月に焼失。その後、八幡町博物館へ資料提供）。この間、地方博物館の設立への助言や、県博物館協会の役員として活躍してこられた実績が認められたものです。

〔議事 一部省略〕

・平成5年度の理事選任 —— 本県からは、県博物館の横山館長が新しく理事に選ばれました。

・平成6年度開催県 —— 山梨県

〔講演〕

「愛知県美術館の再出発」というテーマで同館の浅野館長が約1時間講演されました。要旨は次のとおりです。

昭和30年2月に開館した旧愛知県文化会館美術館に代わって愛知芸術文化センター愛知県美術館として発足したのが昨年10月のこと。

建物全体は愛知芸術文化センターといい、“心の豊かさ、生活の潤いを実感できる地域環境づ



本県からは13名が参加

くり”の一環としてつくられたものである。

愛知県美術館は8階と10階を使用し、8階はギャラリーで旧美術館の機能の大半であった貸会場として、10階は企画展、所藏品展を開催する場として活用している。

美術作品の系統的なコレクションは美術館活動の重要な一面であるが、収集方針を次の四つに置いている。

- ・20世紀の優れた国内外の作品、20世紀の美術動向を理解するうえで役立つ作品
- ・現代を刻印するにふさわしい作品
- ・愛知県としての位置を踏まえた特色あるコレクションを形成する作品
- ・上記の作品・作家を理解するうえで役立つ資料

なお、保存科学の専門的な知識と経験をもった学芸員も配属している。

〔施設見学〕

古川美術館 —— “水”をテーマに、しっとりとした味わいのある作品を集めて展示されていた。

愛知県美術館 —— ちょうど企画展（小川芋銭展）が終わり所藏品展（20世紀の美術）が催されていた。

名古屋港水族館 —— 日本の海、深海、赤道の海、オーストラリア、南極の海の5部門に分け紹介されていた。

（岐阜県博物館 渡辺利昭）

第57回公開講座報告

あ てら 阿寺断層について

と き 平成5年7月17日

ところ 博石館

講 師 志津 匡三氏



本年度第2回の公開講座を、^{ひらかき}蛭川村の博石館で実施しました。講師の志津先生は、長年、地質の研究に取り組むかたわら、文化財保護にも指導的立場から熱心に携わっておられる方です。

今回の講演では、付知町から下呂町に走る阿寺断層について、実物資料及び多数のスライドを用いて解説されました。

◎ 講演要旨

県下には、規模の大きいA級活断層が3つあり、飛驒の跡津川断層、西濃の根尾谷断層と東濃の阿寺断層がそれである。阿寺はアテラと読み、アテとは日当たりの悪い山の陰地、ラは方角を指す言葉と考えられる。木曾谷から岐阜・長野県境付近にかけての割合定高性のある山地を阿寺山地と呼び、その西方の美濃飛驒高原に境するものが阿寺断層である。この断層は、中津川市^{なかつか}神坂の中央自動車道恵那山トンネル付近から、北西方向に長野県山口村・恵那郡坂下町をへて、付知町・加子母村へと続いている。断層は飛驒境の舞台峠付近から、いくつかの支断層に分岐して、扇状に開いて益田郡の下呂町・萩原町・馬瀬村へと延びており、延々60km以上もある大断層である。

この断層は、硬い濃飛流紋岩をもみくだいて幅の広い断層破砕帯をつくっており、随所にケルンコル（断層鞍部）やケルンバット（分離丘陵）、断層凹地、断層池等がみられる。

断層の中央部に位置する加子母川や付知川をみると、阿寺山地から流れ出て断層にぶつかり、左に折れ曲がって断層沿いに約7km流れ、再び右に折れ曲がって断層から離れて流下している。阿寺山地と美濃飛驒高原の垂直ずれが約700mであるのに対して、水平ずれが7kmと大きいのがこの断層の特徴である。

阿寺断層の南端部は強破砕帯になっており、中央自動車道恵那山トンネル付近では花崗岩がマサ化して粘土状になっている。落合川の支流^{なれり}温川ぞいでは、阿寺断層の水平ずれで土岐砂礫層が押されて、上流側に花崗斑岩を押し上げた逆断層がみられる。

恵那郡坂下町では、新旧何段にもわたる木曾川の河岸段丘を阿寺断層が直線的に見事に切っている。上位段丘である松源地段丘によりこのあたりの阿寺断層の変位速度を調べると、1000年間に水平で約2m、垂直で約0.5mとなっている。

阿寺断層が付知川を横断するところに、河岸段丘を切って高さ6mに及ぶ見事な断層崖ができています。この断層に沿い塞の神峠に向かって登っていくと、池底に断層粘土がつまって水を貯えている馬瀬池と大平池がある。

阿寺断層が加子母川をよぎるところにも高さ3~5mの断層崖があり、加子母大杉の近くの断層崖直下には断層凹地がある。舞台峠をすぎると断層はいくつにも分岐し、それぞれ飛驒の山中で消滅している。



(公開講座委員 野原 薫)

〈実践報告〉

スイトピアセンターアートギャラリー開設2年目を迎えて

大垣市教育委員会文化振興会

学芸員 北嶋 広子

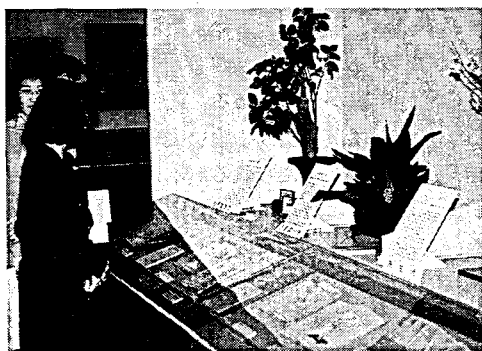


大垣市スイトピアセンターは、大垣市及び西濃地域の生涯学習の拠点を目指し、平成4年4月にオープンしました。当センターは、既存の市立図書館、文化会館に新たに学習館を加えた三館で構成され、中の施設には市が自主的な事業を展開していくコスモドーム、水のパビリオン、アートギャラリーなどと、市の事業に使用するとともに、貸し館として機能する学習室、文化ホールなどがあり、市民の多様な学習意欲に応えんとするものです。

アートギャラリーは、学習館1階の西側に約400㎡の広さを持つ展示室で、市民に美術鑑賞の機会をより多く提供することを目的として設けられ、市の自主企画による種々の展覧会を開催してきました。今回は、このアートギャラリーで行っている事業についてご紹介します。

昨年4月以来開催された展覧会を振り返ると、大垣市が所蔵している美術品の公開（「所蔵作

品展」（や郷土の先人を顕彰する「先賢展」など郷土ゆかりの文化を知り、親しむものと、全国的な公募展の優秀作品から現代の美術の動向を見る「現代美術選抜展」などのように、地元にもかかわらず良い美術作品に触れることをねらいにしたものがあります。昨年、今年引き続いての開催となった大垣出身の守屋多々志画伯の「小倉百人一首原画展」、「源氏物語展」や、大垣市と友好関係の深い鹿児島市を美術と歴史により紹介した「フレンドリーシティ鹿児島展」もスイトピアセンターという新施設の開館により実現したものです。これらの展覧会は、美術作品の展示になる場合が多いですが、昨年度の先賢展である「大垣の華道を拓いた人々」展では、地元の華道関係者のご協力もいただいて、生花による復元も展示するなど、分野を問わない内容になっています。



来場者へのより積極的な働きかけとして、作品の展示だけでなく、展覧会に関連した講演会の開催や、館内のハイビジョンシアターにおいて関係ある内容の番組を制作し、会期中に上映するなどの試みも事業の1つとして取り入れてきました。開館して2年目、総合施設の一環としての難しさと利点がありますが、人々にとって本当に良い文化的刺激となるような活動を模索中です。

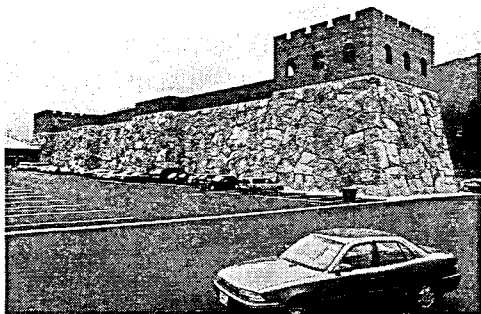


館・園紹介 No.86

文魁記念館，ロードイン・長城

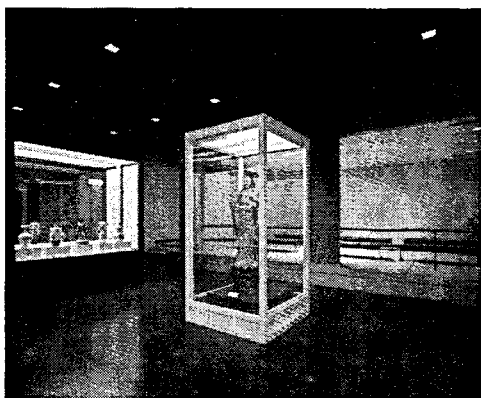
〒508-03 恵那郡付知町 10940-1

TEL 0573-82-2101



文魁記念館は中国北京郊外の八達嶺にある万里の長城の一部分を模して建てられました。建物の積石は、地元特産の木曾石と美濃石が3000トン以上使われています。内部には約6000年前の中国古代の彩陶から、200年前の清朝乾隆帝時代の粉彩に至る約250点の陶磁器類が、時代別窯別に分類し展示されています。

盛唐時代の名器として有名な唐三彩が15点展示しており、当時の貴族文化の理想美の絢爛たる世界を目にすることができます。また宋時代の五大名窯のトップに数えられ、青磁の王様と



言われている汝官窯も10点ほど展示されています。そのほか定窯の白磁、建窯・吉州窯の天目碗、鈞窯・耀州窯・南宋官窯・龍泉窯の青磁、磁州窯の白地鉄絵、そして今でも窯が3000以上あり日本でもよく知られている焼物の街、景徳鎮の青白磁、青花、釉裏紅、粉彩等もあります。

なかでもすばらしいのは、明時代に作られた高さ182センチの一体焼きの「青花釉裏紅観音像」で、衣服は数種の吉祥文様が手書きされ、コバルト呈色の青い色と銅呈色の紅い色が美しい。現在の技術を以ってしても再現は不可能と言われ、技術面、芸術面からも世界のトップクラスと評されています。

当館のメインとして秦の兵馬俑が10体、特に中国にもないと言われる秦の始皇帝俑が展示してあります。当時の軍隊の強大さ、規律のすばらしさ、また優秀な彫塑の技術等、2200年前の中国を彷彿とさせ、来館者はその偉大さに圧倒され引き込まれてしまいます。



悠久の歴史、偉大な中国というものを充分味わうことができます。

展示品の一点一点が来館者の心を捉え、何かを語りかけ、何かを気付かせてくれます。是非ご来館ください。年に2度程展示替えも行っています。また屋上では周囲の山々の景色を楽しみながら、本場中国の万里の長城を歩いている気分も味わえます。

◇交通 中津川、下呂から車で約30分

◇開館時間 午前9時～午後5時

(入館は午後4時30分まで)

◇入館料 大人1000円・中高校生700円・小学生500円(団体20名以上各800円・500円・300円)

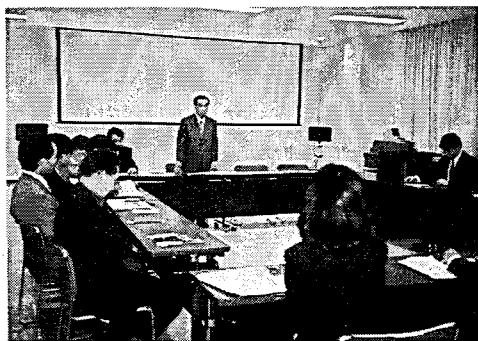
◇休館日 12月27日～1月1日

(文魁記念館 片田常世)

第26回会員研修会

「飛驒地域を例とした 地域博物館のあり方」など

第26回会員研修会を9月30日(木)、10月1日(金)の両日、飛驒の山樵館、飛驒民俗村、高山屋台会館を会場に開催いたしました。



○第1日目(研修会)

・「展示から保存展示へ」

講師 高山屋台会館 水口登美子学芸員

国指定重要有形民俗文化財を展示している屋台会館の創設、新館建設、展示することに関する地域住民(屋台の所有者)との関わりなど展示の変遷、文化財を保存展示していく現在の課題など、スライドを使用しながら熱心な取り組みの実践報告をいただきました。

・「飛驒地域を例とした地域博物館の在り方」

講師 郷土文化伝習館 野村恢司館長

宮川村の生活用具等の民俗資料の調査・研究、収集作業など郷土文化伝習館の創設期の取り組みの様子や国指定への歩み、埋蔵文化財、村おこし等と関連した今後の抱負、特別展、体験学習会等の開催を含めた現在の館の運営など熱意溢れる詳細な実践報告と提案をいただきました。

・「飛驒の山樵館」施設見学

講師 飛驒の山樵館 蒲 嘉彦館長

飛驒の山樵館の運営組織、特にボランティアの手による特別展の開催など地域博物館の今後の運営に大変参考になる話をいただきました。その後で、真新しく整備された素晴らしい収蔵庫の見学をさせていただきました。収蔵庫の整備、増設の在り方で大変参考になりました。

・懇親会

○第2日目 施設見学

・飛驒民俗村

講師 小山 司 学芸員

見学時間の関係で、飛驒地方の失われて行く民家30数棟が民具と共に展示されている施設の代表的な家屋数棟を、小小学芸員の解説のもと見学させていただきました。展示民家の囲炉裏には火がたかれ、藁草履を作るボランティアの方からお話しを聞くなど、心温まる研修ができました。ここでも、屋根の葺き替えの準備など伝統文化財の保存展示の在り方を勉強させていただきました。

・高山屋台会館

講師 水口登美子学芸員

昨日の研修会の実際のようなすを見学させていただき、施設の素晴らしさと担当者の熱意を肌で感ずることができました。



○研修会を終えて

研修会は参加者全員のご意見をいただくなど大変熱心にすすめられ、参加いただいた方からいろいろ勉強できてよかったとご感想をいただきましたが、参加者は13名でした。会員の皆様方の積極的参加と、研修会の在り方へのご意見をお願いします。

(研修委員長 遠藤俊治)